

木鹿助

特 54
19



春水座 一番目 早苗鳥伊達聞書

場割

○序幕 邸内鹽竈神社の場(同長家松ケ枝宅の場) (同奥御殿床下の場) 二幕目 世良田宅の場 (同嘉村屋舖假牢の場) 三幕目 花詮議の場 (同返心水戸街道鷹野の場) 四幕目 川魚屋の場 (同高輪大木戸の場) 五幕目 奥御殿親子引れの場 六幕目 大詰御評定所の場

二番目 邯鄲諸國譚

場割

○序幕 高野山女人堂の場 (同學問路宿旅籠屋の場) 二幕目 八幡境内願堂の場 (同別當所庭先の場) 三幕目 大切 屋敷内落窪宅の場 (同高市城下盆踊の場)

役割

Table listing roles and actors for the two plays. Roles include 修行者妙典, 落窪京太郎, 愛妾高尾, etc. Actors listed include 市川糰十郎, 澤村田之助, 中村傳五郎, etc.

○一番目 邸内鹽竈神社の場

本舞臺黄葉木光の鳥居左右石の玉垣都て社前の体茲よ中間四人出て△先殿様の後首尾がわるく袖ケ崎へ御隠居とあり幼年の千代様と相續と極り今日淺岡殿を始め女中方が養育有るとの△其淺岡を松ケ枝様と不義をして居杯(松ケ枝)が○悪人の流言を相違ねへど皆々上手へ這入る後落合金兵衛先に修験者利生院白木の箱をもち出来り(利)兼て埋め置し此人形と調伏の願書を以て松ケ枝淺岡を罪と落せ(金)女計りの奥御殿忍び入るゝ先(安堵)利(利)利約束の(金)賞美の金の宅へ同伴ト兩人立上る處鳥居の内多田刑部出来り利生院金と渡し不義に落し鉄之助を留居させしゆ今宵御殿(荒木和助)を忍ばせ千代と切害させ(金)萬一仕損する時(刑)後日愁ひを押はるり我より暇を取し此禮状(利)併し御門の嚴重ゆゑ(刑)其處のぬからぬ嘉村隠岐と汚名を着せん嘉村が邸の門切手兼て盗み置たれば和助は渡し通門させる

(利)トレお暇と立上るト向ふよて利生院暫時と止め嘉村隠岐守上下形りよて足輕は鐵櫃を持せ出来り(嘉)先刻其方の法力にて土中へ調伏の人形ありと見通しお違はす調伏品あり宛名ハ辰己の男女と記せしより松ケ枝淺岡疑ひ掛りしが其方の法力にて此鐵櫃の内は有物を當て見やれと突出す利生院は是か當惑し種々の當品を云ト石佛と云嘉村ハ足輕より付け鐵櫃を明させる内より青年出る利生院ハ南無三と述る(嘉)已れ賣主と引戻す金兵衛ハ露顯の元と一刀ハ利生院と切捨刑部と顔見合兩人向ふへ這入る後嘉村ハ利生院の死体改め以前の五十兩を出し見て極印ハ正しく三ツ引龍と金を懐中に入れ道具廻る

○上邸松ケ枝宅の場 (本舞臺都て武家長屋住居の休爰に中間佐五平門番嘉兵衛の女房お豊来て松ケ枝鉄之助の病氣を見舞ト上手障子の内より鉄之助出て(鉄)無實の罪めて君の襟前を遠ざけられしが浅岡へ曲者お忍び入らんも計られず曲者お多門を通行せしバ密告せよ(豊)承知致し

ましたト歸る後佐五平ハ行燈を提出來り「時の鐘雨ふち
り向ふ大場道益長合羽大小醫者の拵へて出來り内に
入(鉄)診察を願ひし覺へ(佐)先刻私くしが願ひまし
た(鉄)ソリヤ其方々(道)病家が多いに延明致ました(鉄)
最早全快致しましたと斷る道益ハふつゝ云ながら歸る
後ハ豊多駈來り只今曲者が通門ましたト告る(鉄)我君の
診察處を守護せんと鉄扇を持立上るト道具廻る

○奥彦殿床下の場 爰へ赤合羽の中間夜巡りて通り行
後黒着附の局澤田與行松島錦木皆々懐刀ヲ差含燈を持出
來り(皆)早く手分をして君の守護やさんト左右ハ別れは
入る後下手床下より荒木和助出來り(和)漸く忍び入りし
ガト彦殿を窺ふ處へ手水鉢の後より松ヶ枝出來り曲者
と和助を引戻す和助ハ南無三と振拂う柔術の立廻りとな
りト彦殿もて和助の頭を打致へ以前の局出來り折重を
り和助を捕縛し頭巾を取顔見合ヤ、兵部様の(鉄)夫で機
子が(和)エ、いまくしいト無念の仕打ひて幕

(丹)先刻母の断りの義理ある娘と云はれしガ彦身の實父
(梅)ハイ先年殿ハ彦諒言をす上お手討ふありし且三平が
娘家断絶の後門番の嘉兵衛ハ發育ましてムリ升る(丹)扱
ハ我親々の結縁せしお梅とのでありしかト手を取引寄色
愛の仕打ある茲へ襖を明甲斐出來り不義者其處動くホト
一刀を抜兩人の眼先へ突付る(丹)斯成る上ハ是非もあ
しイヤお手討ふト兩人合手する甲斐ハ兩人を見て思ひ入
れあつて刀を鞘に納め(甲)其魂ひを見る上ハ命を助け嫁
人して女夫ふあさん(兩人)エ、さんと(甲)幸有合此先
孟ト取上兩人よさし祝言の式をする兩人ハ悦び吞(甲)斯
因みを結上ハ沙澤氏ハ頼みありお梅ハ暫時此處を(梅)長
まりましたト奥へ行跡(甲)貴殿を頼む其義とすハ(丹)彦
恩を受し上ハ身お叶へし事おれバ(甲)スリヤ彦承引下さ
れるハ先血判致されよと連判書を出すを見て恟り(丹)彦
分家兵部様を始めとして一家中ハ大半一味の(甲)兵部殿
の子息市正殿を世お立んど大義を企て先主ハ淫酒を進め

○二幕目 世良田宅酒宴の場 (本舞臺正面銀漢都て甲斐
住居の体茲へ嘉兵衛の女房お豊入り來り娘お梅を何卒お
返し下されと云爰へ金兵衛出て今日ハ彦後見の兵部様よ
隠故守様の御客よ付其方の娘を頼みし事おる歸せぬト兩
人争ひの處へ御膳番沙澤丹三郎出來り兩人と止め(丹)お
梅殿ハ拙者が預り升ゆる案心と成され(豊)沙澤様の仰せ
かれ共義理ある中のお梅おる必配致し升ると娘を頼んで
お豊ハ向ふへ歸る(金)世良田様の余程お梅お彦執心と見
え毎日彦手元へ引付酒の相手と(丹)大場道益殿も入來よ
て奥の圍で酒宴最中トレ鉄立よと立上る道具廻る

○甲斐宅茶座敷の場 (茲ハ世良田甲斐落合金兵衛醫師道
益お梅お酌をさせ酒宴の末密談をせんと甲斐ハ道益を連
奥へ這入る後(金)是お梅との此程も通り甲斐様の妾よ
お成りおされ(梅)貴人の妾杯お成り升より門番住居の方
ガト解ぬ處へ奥よて手を打余義なく金兵衛ハ奥へ行後ハ
獨人お梅ハ内へ歸りたいと愁の仕打爰へ奥より丹三郎出

袖ヶ崎へ隠居させ此上ハ當主へ害殺願みたしト迫る丹三
郎ハ是非なく血判する是よて大願成就と悦び廻る

○同詮議の場 道具庭先の体爰ハ館兵部真中お嘉村隠岐
守下手お松ヶ枝鉄之助居並び爰へ以前の荒木和助に繩を
掛引出し(嘉)何者ハ頼まれ彦殿へ忍びし(和)兵部様よ
り暇が出金が流しに賊に這入りしト白状せぬより鉄之
助立懸り鉄扇よて打賣る苦痛を見てたまりうね(兵)松ヶ
枝侍て其方ハ差控の身を以て何故彦殿へ推参せしと瀧岡
ガ元へ忍び來し(松)左様お覺へハトつまる爰ハ甲斐出
來り此場を扱ひ松ヶ枝の整居を許し和助の吟味の拙者よ
彦任せわれト中間四人出て割竹あて責んとする處ハ向ふ
より神並三左衛門駈來たり(神)其持問ハ私くしハ仰せ付
下され(甲)望みとあれバヤ付ん(神)ヤイ和助此腕ハ折る
の骸ぐだけけるハ性根をすへる(和)盜入りしハ外お子
細のね(事)だ(神)覺期しんと和助をいたわり打松ヶ枝ハ
手ぬるしと立上る折しも時計ナル(甲)刻限されバ吟味と

止め和助の拙者預りやさん(嘉)罪人の拙者の掛りと和助を引立嘉村松ヶ枝の向ふへ這入る後兵部神並甲斐へ詰り鐵之助をお守役に再勤させしを不審する(甲)何事も拙者が胸のありと沙澤も同意せし連判を見せ三人密談の處へお豊出來りお梅を連歸らんとせざる(甲)お梅の只今渡す程は此方の頼みと(豊)娘さへお歸し下されば何れ用もても(甲)安藝を毒害致し吳上(豊)エ、ト悔り厚恩を請し館安藝様あんで毒が(甲)不承知なれば娘を殺とお梅も豫誓を掛丹三郎が引出し此人質をお豊に泣々毒害を致し并る(甲)首尾よく仕とげる迄娘の性質と手拭を取るお梅の豊おそがり歎く爰へ金兵衛犬を連出來り結び飯を喰わせる犬の血と吐死ぬ(甲)毒の利目のト顔見合道具廻る

○嘉村邸仮牢の場(本舞臺真中大格子都て仮牢夜の体半番四人居並び酒を香和助の元角力で有つたと云演詞あり鏡を落して上手へ這入る後「更渡る鏡も四更のひよさ八目とつとひ神並がト向ふより神並徳利ト重箱と提出來

りリット牢の傍らへ寄(三)和助く(和)だれだく(和)神並り(三)靜おしろト四方り見廻し鏡の落しあるを天の思と拾ひとり和助を牢内より出す(和)宜く來てくれたチ、無事で居たりト悦び泣(三)コレ和助サ腹がへつたで有ふ甲斐様より下されし酒肴と出す和助の悦び酒を香結びを食ひ和助が苦痛の体と見て介抱する(和)ヤイ神並深切らしく見せけ毒を呑したぢ(三)何で呑していと傷か(和)無念ト血を吐苦るしむを見て(神並)心付扱ひ和助を殺さんため此酒お毒が仕込めつたコレ和助勘辨してくれ(和)お主も討られて持て來たのト兩人甲斐大悪不實を怒り(和)とても命の助のらねト由井正雪せへ悪事り買かね(和)より貴様も果に此様め馬鹿を見るゆゑ改心して忠よ心を寄て呉(三)おめへの意見は随い今より改心するうら成佛して呉と泣和助の悦び合掌する神並の涙をぬぐひ是が此世のト花道にて伏拜し和助の苦しき仕打てて居る神並の一散又向ふへは入ト幕

○三幕目花川戸五平次内の場(本舞臺魚屋見世の体爰は娘お村の居る處へ家主六兵衛と酒屋の子僧來て笑しみの演詞あり子僧の下手へ這入る後五平次歸り來て六兵衛と断しの折向ふより五平次の長女おつる先よ跡より紺圍半よて角力の中賣辨太出來りモシ明神堂右衛門殿の内(一)鶴(それ私しの兄さん内)向ふでムり升るト聞捨よしてキエロく見廻し辨太の下手へ這入るお鶴の内へ歸るト爰へ金貨甚左衛門入來たり(甚)此程貸た七十五兩を渡して呉金が出来ずバ約束通りね鶴を女房と呉る(五)縁談の親の自由よの成りませせん(甚)そんなら出願するのら家主よ預りをト迫るお鶴が明日迄と日延をするを甚左衛門の向ふへ歸る後お鶴の身を賣事を五平次お断し兩人與へ這入る後向ふより神並三左門出來り(三)三年跡の家出をし昔信もしねへうら親の内でも歸りふくいも門口から内を見てコレ妹々(鶴)ヤアおまへ兄さん(三)コレと四方見廻し内入り五平次も奥より出て互は無事を悦こ

六(三)私の角力とよし兵部様の家來もあり今より越後へ飛脚お行ゆる此金を元手にして呉ト百兩を出して渡す五平次の悦び既ぬ娘お鶴と吉原へ賣處をせめて一夜ありと留る(三)巨細の跡ふて断すが若屋舖り尋ねて來たら内へ來ぬと云つて呉と胴巻を忘れ是が此世の別れト云仕打て向ふへ歸る後胴巻を失念せしを兩人の心配する處へ沙澤丹三郎出來り三左衛門義二百兩の金を盗み逃去しが今宵此家へ來りしならんと聞いて五平次悔りし(五)勘當同様の悴宅へ入参りませぬ(丹)参りしおれバ郎へ知らせよト丹三郎の歸る後五平次切の悴が盗みませしかトお鶴も心配する爰へ三左衛門胴巻を取戻るを五平次の取て押へ位牌おて打擲し盜をせし事を責る(三)他聞と憚る大事ゆゑ断すまいと思へども價産土よ包ますや升ると甲斐一味し悪事の手先を働さし荒木和助が死後の遺言を守り賊の人あつて死のふと連判書を盗み國へ行片桐様へ訴へ一ツの功を立る所存又追手をさける其ため

金を盗んぞ親や妹も苦勞を掛し(五)チ、悴出かし
 九宜く改必した少しも早くお國元へト云時以前の丹三郎
 盗入覺期と内よ入る神並見て切掛るを丹三郎止め(丹)汝
 ちよ事こそあり子故も迷ふ親心我も一人の母あれハ胸
 お當り今こそ改心せしめれ共武士が血判せし上り返心お
 らず今我を討いささよく出立せよ(三)スリヤ汝澤様も
 改心トナ(丹)後日切腹致し主家へお詫を(三)是よてお
 別れや升る(丹)シテ白石へ(三)千住通りを奥州路へ
 丹)イヤ夫のわやうし追手をさける水戸海道(三)夫ど覺
 への裏道ト立上る愛へ以前の辨太宛るを投(鶴)兄さんば
 無事ト(三)おさらバト出立よて道具廻る
 ○水戸海道宿の場(正面辻堂田舎道の遠見愛お百性
 大勢出て今日い修領主様の修野ゆゑ道普請をするとして
 皆々上手へは入る跡辻堂の内より神並出て夜道疲れよッ
 イラトく寐たうち日も西ト立上り花道へ行時向ふよ
 り下居ろくと水戸家の先供出来り神並の姿を見て不

密を起し何者あるぞ(三)私くし江戸表より白石
 の者(供)白石へ参るお水戸海道を通るいれあし
 掛るを投る處へ朝日奈彌太郎出来り尋問の未荷物を解
 せろト迫る神並ハ大切の荷物の解難しと云是より兩人
 柔術の立廻りとありトト神並を捕縛し引立る處へ向ふよ
 り其曲者引お及バサト水戸黄門公出来り床木は掛り神並
 の様子を見て朝日奈彌を解せる神並お南無三ト思ひ
 入れ黄門公ハ一巻を取上讀まれ驚ろさし仕打よて(黄)コ
 リヤ徒黨の連判(朝)扱こそ曲者(黄)包ますヤ立(三)モ
 ウ是迄ト惡事へ組せし改心し連判を盗み白石へ参るト
 白狀する(黄)今其方が立より容易あらざる館家の内亂
 此一卷ハ白石へ届け遣すゆゑ其方ハ此場切腹致せ(三)
 夫さハ修屈下されバ外ハ望のムりませぬと肌押ぬき刀
 を腹へ突立んとする(黄)忠義顯れたり切腹お及バサ早々
 白石へ立廻連判を証據お断へ忠を立よ(三)有難き君の修
 恋(黄)一卷ハ光國內見せぬぞ只胸中よト思ひ入るて幕



○四幕目袖ヶ輪館家門外の場(本舞臺正面家根付の門傍
 らに門番所あり愛久内時繪の重箱を持出来り此お香の
 茶道の珍買様より頂戴したが後おたべやうト行かざる處
 へ門の内方落合金兵衛出て其香をせび賣て呉ト願ひ久内
 へ書来でい賣ぬと云を漸く壹歩て賣請る久内の金を請取
 悦び向ふへは入る後(金)此毒の入りし香を久内お喰はれ
 てたまる物ウレ人知れず捨て来やラト金兵衛ハ上手へ
 へは入る後向ふより館裏出出来り(安)殿よ此下廊ハ修
 居遊バし無修不自由からん修機嫌を伺とんと来るト上手
 より金兵衛来て(金)是ハハ安(安)ハ、金兵衛殿か
 殿ハ拜講致し度出府せしゆゑ修披露下され(金)イヤ殿ハ
 修乱心みて修目通りハ(安)修乱心もて取次めされ(金)
 承知致したト門内お入る愛へ濱田支掛出来り(支)殿ハハ
 修乱心ゆる荷の中おされ共修對顔ハ成るまじト云愛へ以前
 の金兵衛来て(金)殿の仰せお我ハ差圖を待たず出府せ
 し我儘親仁目通り成らず押て推參致せバ手討お致すとの

金を盗んだ親や妹は苦勞を掛し(五)サ、悴出かした宜く改必した少しも早くお國元へト云時以前の丹三郎盗人覺期と内入る神並見て切掛るを丹三郎止め(丹)汝ちよ事こそあり子故は迷ふ親心我も一人の母われは胸お惜り今こそ改心せしめれ共武士が血判せし上へ返心あらす今我を討いさぎよく出立せよ(三)スリヤ汝深様おも改心ト(丹)後日切腹致し主家へお詫を(三)是よてお別れヲ升る(丹)シテ白石へ(三)千住通りを奥州路へ(丹)イヤ夫のわやうし追手をさける水戸海道(三)夫ど覺への裏道ト立上る爰へ以前の辨太苑るを投(鶴)兄さんは無事ホ(三)おさらバト出立よて道具廻る

審を起し何者あるぞ(三)私くしの江戸表より白石へ通行の者(供)白石へ参る水戸海道を通るいれあしと取巻掛るを投る處へ朝日奈彌太郎出來り審問の未荷物を見せろト迫る神並ハ大切の荷物ゆる解難しと云是より兩人柔術の立廻りとありト神並を捕縛し引立る處へ向ふより其曲者引お及バサト水戸黄門公出來り床木ヲ掛り神並の様子を見て朝日奈彌は荷物を解せる神並お南無三ト思ひ入れ黄門公ハ一巻を取上讀まれ驚ろさし仕打よて(黄)コリヤ徒黨の建判(朝)扱こそ曲者(黄)包ますヤ立(三)モウ是迄ト悪事へ組せし改心し建判を盗み白石へ参るト白狀する(黄)今其方が立よハ容易ならざる館家の内亂此一卷ハ白石へ届け遣すゆゑ其方の此場切腹致せ(三)夫さハ辱下されバ外ハ望ハムりませぬと肌押ぬき刀を腹へ突立んとする(黄)忠義顯れたり切腹お及バサ早々白石へ立越建判を証據し訴へ忠を立(三)有難き君の汚意(黄)一巻ハ光國內見せぬぞ只胸中ト思ひ入て暮



○四幕目袖ヶ崎館家門外の場(本舞臺正面家根付の門傍らに門番所あり爰久内時繪の重箱を持出來り此お肴ハ茶道の珍寶様より頂戴したが後ふたへやうト行かゝる處へ門の内方落合金兵衛出て其肴をせび賣て具ト願ひ久内は肴未での賣ぬと云を漸く壹歩て賣請る久内の金を請取悦び向ふへは入る後(金)此毒の入りし肴を久内お喰はれたまざる物ウレ人知れず捨て來やうト金兵衛ハ上手へは入る後向ふより館家出來り(安)殿より此下邸へ御膳居遊バし嗚呼不自由あらん御膳を伺とんと來るト上手より金兵衛來て(金)是ハ(安)安藤殿(安)ハ、金兵衛殿か殿ハ拜謁致し度出府せしゆゑ御披露下され(金)イヤ殿ハ御乱心おて目通り(安)御乱心おても取次めされ(金)承知致したト門内お入る爰へ濱田立番出來り(立)殿に御乱心ゆゑ伺ひ中おれ共御對顔ハ成るまじト云爰へ以前の金兵衛來て(金)殿の仰せお我ハ差圖を待たず出府せし我儘親仁目通り成らず押て推參致せば手討お致すとの

皆々出向ふト小十郎權上下茶道お銘酒の陶を持たせ出來り座よ付君を拜し一同も禮義の教我君の命を祈して持參せし此銘酒(淺)淺前様小十郎殿より献上の神酒召上られ升せ(龜)イヤ〜酒一一生呑ぬ父上が忠義の家來お勞させし元お酒酒ゆゑと手一一生呑ぬとらウツたわへ(小)ハ、梅檀ハニタ葉よりりんぱし徳明敏智の今のお詞幼年の君迄が心勞遊とも昔先君の行亂行是を思へハ世の中お恐るべき酒酒でんる(鉄)末たのものし君の仰せト皆々愁ひおひせよ小十郎人拂と願ふ是よて女中上手へは入る後四人(小)此度證據の品を持參せしと神並方請取し連判を出し見せる淺岡鉄之助見て驚き如何して手入りしや(小)神並方先非悔て返り忠其本人も同伴せし(淺)少しも早く一番を父安藝の元へ届けたき物(鐵)人手を頼むも心元なし拙者お持參致さんト立上る(龜)コレ鐵之助此神酒を愛護し送り吳よ(小)臣下をいたわる我君様と鐵之助の陶器を持向ふへは入る(小)淺岡殿

其元よ頼みぐる(淺)シテ頼みと(小)お目見得頼ひ度小兒ぐる(淺)シテ其子(小)其者の先年君の涉手討ふ成りし白川王殿が悴でんる(淺)エ、ト胸くり(小)サ、其子の當處めて父よ分れ家名ハ斷絶里方へ引取られしが其後淺岡殿イヤサ其母の當處へ召出されし其後の母み逢たいと袖みすがり頼ゆゑ此度伴おひ連登りしゆゑお目見得頼升る「淺岡の子の恩愛よ達たさハ飛立程よおもへども別るゝつらさ思ひやり(淺)モウ此世おんからざるト浅岡し下さるが浅高恩ト「立派お言も涙だぐむ(龜)マレ淺岡其方々悴あら達たい早く(淺)輕々しくお逢ひの義(龜)イヤ苦るしうあい小十郎連參れ(小)淺岡の上意てんる千代松是へト呼向ふより千代松持形一本ざしみて出來り平伏する(龜)其方ハ淺岡の悴よ(千)ハ、千代松と升る母様淺岡宜敷ト袖みすぐる淺岡の人眼とト君の涉前控へ居や(龜)コレ淺岡母じやと云てヤイヤ(淺)國元を出立し此江戸表へ來し上り親子でないゆゑ其

の手を放しや(千)ヤし母様おとあしうする程お傍にお置下されましト云お淺岡の胸せまり瀧あす涙を押し突のける千代松泣さるび情なやと取すがる龜千代立出たまい千代松の手をとり淺岡よりらむ淺岡の兩人の子役を抱へ愁歎あり涙を拂ひ押付手元へ呼寄かはゆがッて遣は程に少しも早く淺岡を下りや千代松泣さるら向ふへ歸る後以前の局出來り(松島)先刻仰せの通り淺岡の沙澤丹三郎よお毒味をさせし處面色變り(小)シテ何ッ中置のせぬや(松)後よ殘せし母の身の上何れも知らぬ事ゆゑ一命お助け下されしと頼みの一言にて血を吐死去を致しました(淺)扱の悪よ加増したかテモ恐ろしい曲者を見る時ハ捕縛て差出しやト皆々心得ましたと幕

座し双方を呼入れる是よて上手より世長田甲斐善太夫金兵衛下手ハ安藝甚五兵衛六左衛門出て座お付(山)安藝より頼み出たる廿七條の内主人を殺さんト大場道益お毒藥調合を頼みし不届申開有るや(甲)其義少しも覺へムりませぬ我執權と妬み大國を横領せんと安藝の工てんる(山)サレハ兩人對決致せ是ハ兩人進み出(安)辯を以て退れんとする共道益へ遣したる番翰ハ此方の手よ入つた(甲)何不足あつて毒害を工べきや(安)だまれ兵部殿の嫡子市正を家督お立已れ五十四郡を握らん企て明白なり(甚)野州鍋掛の原よて殺されし道益が懷中より朝合頼みの此一書(金)死人が何で証據よあるふや(安)甲斐伏罪致せ(甲)偽書よ何で伏罪仕様や(山)双方控天下の裁斷辨へからぬり此上ハ甲斐又書合を致させん安藝其證書を是へ出せ安藝ハ細川の出席を恐ひもぢ〜して居る山名のせつこみ早く差出せト云時向ふて其證據差上る事無用と細川内膳正出來り座よ付山名の折悪と云仕打

(細)館家の件、掛りの掛り大老に御見物有りたしシテ
道益の懐中へ出し書翰其方覺へあるや(甲)少しも覺へム
りませねと手前が見ても宜く偽たり(細)然らば夫あて書
合をいだせと書面を見せる甲斐の思ひ入れあつて筆をと
り書合をして髪を扱はさんで押印をして差出す細川
引合見て(細)誠お是ぞ同筆同印是も知らぬとやすう
(甲)存じませぬ(細)ヤア天下の奉行を盲目と思ふや今汝
髪を扱は下お敷しゆ斯ぢぎれくお押印なし(甲)エ
エ(細)且是五拾余人が血判せし此連判を盗み訴へ出し神
並三左衛門是へ呼出し對決させんと爰へ神並出來り兄弟
分の荒木和助を毒害せし不實始め悪事の一件一伍を立
るよ(甲)汝如きの下郎も悪事の手先を頼ふや(三)ソウ白
まつくれるから此書付も覺へがあらふト甲斐方和助に渡
し置し証據を出せ(細)取上見て「此度の一義首尾能致し
呉し上の百石還す者あり荒木和助へ世良田甲斐コリヤ是
道益に送りし書翰と同筆あり何と是もてや分あるや甲

斐とふじやく甲斐の無念の仕打にて此上の安藝ト合拷
問を願ひ(細)ハテ不思議な事を望む侍いたる者の獄
卒の手を下るの家の環瑾とすする事存じ居る大藩の執權
たる者は程の譯を知ぬ事の有るまじ安藝の老体を見込合
拷問を願ひ已れ拷問をこらへ安藝を落命させん工よか
(甲)エ、(細)夫共獄卒の手を渡そふや(甲)サア夫(細)伏罪
なすりサアくく甲斐返答致せ(甲)無念赤面し恐れ入
りました(細)左もあらん此上の沙汰を相待おるふ安藝
の勝手引とれ(安)有難く存じ升ると悦び皆々上下手へ
は入る跡甲斐登人残り居る爰へ茶道服薬を持參して脇差
を置忘れぬく甲斐の服薬して四方見廻し脇差を取上げ中
身を見て遠れ金色と白眼思ひ入れあつて道具廻る
○本舞臺都て白地中形の襖役屋敷控所の休爰より以前の安
藝甚五兵衛六左衛門神並居る(三)私くし和助の供養を
致し度存じ升るゆゑお先へお暇を願ひ升と下手へ進入る
後侍出來り浮大老方浮用お付お出ありたしと云是もて

熊田峠谷の兩人の下手へ進入る後甲斐そつと出來り安藝
の横腹を突安藝其手をとらへ立廻る物者お熊田峠谷出來
り甲斐も驚る熊田の切れ倒れる三人立廻るがら道具廻る
○本舞臺元の上段の場爰へ甲斐大わらひよ成荒もて出來
るト大勢の待出て驚る甲斐大立廻りト組伏られるト此
道具廻る○元の控所の場爰に安藝手負にて苦るしむを是
を熊田介抱して居るト正面の襖左右よ明細川内膳正出
來り自ら服薬をさせる安藝の眼を開き拜す(細)五十四郡
の安堵成るぞ(安)ハ、有難き浮掟勝利を得しも全く侯の
御恩澤(細)是とやすもさつころ恩義を受し天草のト安
藝を見て愁の仕打(皆々)ハ、アト平伏する拍子幕
○二番目序幕 紀伊國高野山の場本舞臺都て山組の道具
爰へ坊主三人出て此山の女人禁制故女人堂で油を賣り宜
くかいと皆々上手へ這入後下手杉林しより鐘三郎の妻小
笹實の堂介の後家お雪先よ手代鐘六旗形もて出來り(雪)
夫のお骨も納たゆゑ是で安心早く下山し升う(鐘)且那様

が浮病死の節私しへ浮遺言おのお雪も年若殊よ都の藝子
ゆゑ後家を立通す心元さいも私しよ後見をして呉と
お頼ゆる(雪)其遺言をまへ壹人で聞し合點行ぬ女
おがらも探を立通し升形屋を立て見せる氣じや(鐘)夫の
悪い浮了簡斯男が惚込たら本望遂すあやかりぬと口説仕
打(雪)扱私しを此山中迄運だして(鐘)チ、那旦の遺言
だとなりつて内の金を二百両盗んで來た故アノ鐘六と
駈落したと探してゐるや(雪)エ、そんなら其方の工でわ
つたかト胸くりする(鐘)浪花の店の浮新造も元ハ祇園の
流行子雪野と云つた其時おらとふした縁か首つ惚込込だ
是のら先の女禁制人家もかい山中とふでも思ひを遂て呉
るとお雪を引寄るを振拂廻る(鐘)エ、やかましいト手
込め仕様とする此時山あれ出し烈しき鳴物あてお雪を追
掛るト鐘六の誤つて谷底へ落入るお雪のホット思ひ入
あつて立上る爰へ修行者妙典實の落鐘鐘三郎鼠の衣裳
尉子を背負鉦を鳴し出來り少しも早く麓お行んと行をお

雪かし留て私し浪花商人の妻小笹とす者夫の遺骨を
 山へ納め参りし處 供 男が佛のお罪で谷へ落此先の勝
 手も知れぬ山道ゆる麓迄お連下されましと願(妙)是も他
 生の縁小笹といふやら似寄のと思ひ入れあつて兩人下
 手へは入後黒塚官六郎同く官八野袴羽織大小まで出来り
 兩人の跡を見送りアノ女ハ藝子雪野ハ相違無(八)修行者
 の跡を 宿屋を突當升(二)否々今夜ハ服ハ麗の學問
 宿へお泊りゆる役人又ハ付兩人の宿を調る宜しいアノ
 雪野ハ常春浪花のハ限者ハ身請をされしと聞し如何し
 て修行者ト登山せしト不審の思ひ入れて道具廻る
 ○同尋問宿安泊夢の場 本舞臺銀地の襖床の間ハ摩利支
 天の畫像を掛屏風を立廻しあり爰へ袴形めて落窪鐘三郎
 出来り(鐘)ハテ夢と云物ハたわいも無物師匠の娘おさみ
 と夫婦の中ハ京太郎と云子迄儲けしが四年前おさみハ病
 死せしゆゑ其亡骸を高野山へ納めんと悴京太郎を浪花の
 姉の元へ預け女房の遺骨をお山へ納め其歸り路おさみ

お似たる女お出會木賃宿へ泊りしと見たハ假寐の夢あり
 しカドレ女房おさみを起し無事を語り合せんとおさみお
 さみト呼屏風の内よりたさみ屋敷風の拵へ出て出来り夫
 鐘三郎が夢の内ハ外の女と木賃宿へ泊りし事を聞悟氣を
 起し一ツ寐を成されたてふり升(鐘)修行者の身故左様
 奇事ハ致さぬ殊も今年十二才の悴迄有るか故ト摩利支天
 へ備有る神酒を下夫婦まで酒宴の後色愛の仕打あつて兩
 人屏風の内へ這入トドロムよかり此道具居處ハ替る
 ○本舞臺都て木賃宿半敷の体屏風を立廻しある爰へ村役
 人出来り夫婦連の六部が泊つて居るなら身元を調るとハ
 陣へお泊りの花城様よりお達し(宿屋亭主梅助)サア此
 屏風を明るも大不酔と云時内ハ六部妙典出来り扱ハ今の
 ハ夢で有し(村)先刻宿帳(近江國と書れまし)たがお連
 のお女中の身形も變つてゐるが御家内でもり升る(妙)
 サアそれハトぎツくりする處へ屏風の内へお雪出て押
 女房でもり升と云ふ妙典ハ迷惑の仕打あつて南無阿彌陀佛



南無阿彌陀佛(村)シテお名前(妙)私し元近江國鐵作
 家の料理人落窪鐘三郎と云升子細有て發心致し修行者
 妙典とあり高野山へ參詣せし者と聞ハン修屈を致して參り
 升ると村役人ハ奥へは入後お雪ハ泣伏す(妙)不思議縁
 で宿帳へ夫婦と附たも思因り夢の内ハ言乍ら枕換せし
 二人ハ中夢幻しハ亡妻と思ひ違て一ツ夜着眼覺て見れば
 連の和殿(雪)最前ハ断しハ御家内の遺骨を納め高野山へ
 お出と聞ハ私しも同じ此宿へ共寐をして探を破りし上ハ
 亡夫へ言譯し死ぬより外ハムリませぬ(妙)シテ和殿の姓
 名ハ(雪)私しハ大坂高麗橋升形屋堂助が妻お雪と云升る
 (妙)扱ハ福原屋の別家堂助殿の妻で有し(雪)何してそ
 れを(妙)福原の家内ハ我姉とて悴京太郎を預け置しが其
 時の断しハ堂助殿ハ死せし後妻お雪ハ二百兩を奪ハ手代
 鐘六と断落せしと兄の立腹(雪)サア夫も鐘六ト云思者ハ
 計られ高野山迄連出されし身の因果(妙)浪花へ同道致し
 兄に話して疑ハ晴さんふも今宵の夢(雪)何卒お見捨さく

私しを連退女房として下さんせと取廻り願ひ妙典の是非
無思ひ入れ愛へ村役人案内にて花城家の家老本竹喜大夫
入り來り先刻承せられバ修行人者なり元筆作家の浮料理
方との事我主君千早之助殿本陣へ浮泊りの處浮料理が
浮意お叶はず臣下一同浮惑致す故向卒仕官と願ひ度
妙)發心致し世を捨し身ゆる仕官の望みあし(喜)然れ
バ賈て今宵の浮料理調進をバと達ての願ひ妙典の承知す
る是れで案心と皆々悦(妙)早速支度と致し升ラト立ち
上る幕

○二幕目八幡社内頼堂の場 本舞臺正面の頼堂木座と鏡
をわろした額をわけ有る愛へ花城家の侍四人出來り新
參浮料理方の落窪鐘三郎の劍道を鑑み隠さんため此
様を額を上げた相違をし殊も今日内常神前まで黒塚大先
生が小ぼろ組大ぼろ組の晴れ勝負の立合も浮義論も有付
たい物ト皆々下手へ遣入後向ふより花城千早之助先小
性北原門彌家老本竹喜大夫皆々上下にて出來ると上手の

黒塚官六郎同官八出迎ひ(官)我君の浮入を相待今日ハ拙
者預りの小ぼろ組ト(喜)拙者支配の大ぼろ組との試合を
上覽入んと(千)兩組打交り試合勝とも負る共道徳と合
ます試合致せ(官)(喜)ハ、有難き仰せト皆々上手へは入
後向ふよりお雪改め小笹屋敷風ふて梓梅之助下女おたの
其跡を醫者天原流派下男グトねんじようを擔ぎ出來り(小)
小笹)珍らしい物でムリ升る(流)此芋ハ吉野の奥せいぐ
うの瀧の傍りよ生せし山の芋此儘獻上よ成り升る(小)ド
レ參詣を致し升ラト小笹梅之助下女ハ上手へと入ト官六
郎出來り小笹の跡を見送り(流)お慰みのため此山の芋を
獻上致さんト別當方へ參つて(官)夫ハ浮奇特よムる
(流)浮料理方の落窪氏ハ新參乍四五年内よ出世をせされ
京太郎と云美少年もわれ共美くしい評判の小笹殿ハ京太
郎の母とい見得ず(官)小笹の素性を知りあさらぬか彼ハ
祇園の藝子よて升形屋堂助お身請され高野山よて鐘三郎
の妻となりしガ藝子の頃我外妾に致さぬガ残念ナ頼み

置し一葉の(流)浮恩人のお頼みゆゑ(官)持參下されしか
ドレ別當方へ同道致さんト兩人上手へ遣入跡下女のおた
め出來り梅之助様ハ何れへお出成されしやと探す處へ懸
待四吾出來り懸幕の仕打にておためを追廻すト愛へ下手
ハ小笹梅之助を連れて出來り割ては入モン四吾様浮談あ
され升る(圓)イヤ減多よ放さぬト挑ひ愛へ下手ハ
落窪京太郎袴大小よて出來り隔てる小笹ハ悦び梅之助下
女共向ふへは入ト四吾ハ怒り己レ京太郎コッ妨げしをつ
たさと刀を抜切掛る立廻りの末胸打まする四吾ハ叶ハぬ
ト逃ては入る(京)父の教へを忘れ腕立せしト後悔の思ひ
入て向へと入跡上手ハ四吾先ハ皿右衛門毬藏輪平太木
刀を持出來り京太郎又打据られしハ小ぼろ組の名をれト
三人よて四吾へ打懸り立廻の末ト頼を落すト道具廻る
○同別當所附院の場 正面幕を張都て廣間の休愛官六
郎始め諸士居並び献上山芋の演詞ある處へ黒塚官八出
來り只今臺所にて見請しハ大さか儘めて輪切ふなせバ珍

らしき物なる小小さく致し奏上ました(官六)以ての外
鐘三郎少しも早く(鐘)イヤお出よ及ばず只今夫へト鐘三
郎出來る官六郎ハ立腹して何故山の芋を小さく切られし
や(鐘)浮尤あれ共是を料理の古實よして切損せし物から
ず官六何んトヤ(鐘)大なる芋を差上なバ浮實美有べきあ
れ共此後他家へ浮出の節我領分ハ大長芋ありと浮自慢
有て若も他家ハ浮望あらバ必らず夫と贈んと浮約束有し
後此長芋を取てよと浮意有ても二度と有べき物からず其
時ハ何と浮言譚相立ふや左すれば浮主人ハ恥辱を與へる
不忠の至り切て煮上しハ拙者ガ注意失禮浮免下されと平
伏する官六郎ハ面目赤き仕打愛へ侍 四人刀箱を持出し
中より白鞘の物をだし(四人)イヤ黒塚先生先日より求め
度と存せし二刀目利下され(官六)ドリヤ拜見致さうト
刀を抜目利して如何も官業物定めし備前長光ならんが
焼刃の様子でハ初代の則光でもなる(四人)恐れ入たお
目利(官八)拙者ガ兄ハ刀の目利百中當り升るト種々刀の

目利をする此内鐘三問悪さ仕打(鐘)最早譯も立升れば
後暇仕ると立上る(官八)お待成され(鐘)何ぞ多用で(官
八)貴殿のお刀兄の鑑定をお頼成され(鐘)小身の私し
免下され(官六)木太刀は錠を卸せし頼を上し筋を聞迫る
爰へ官八鐘三の刀を持出し中身を見んとするも鐘三立懸
り官八を扱退刀を扱官六郎の眼先へ突付るト奥方千早之
助出来り鐘三の手練通れあり本日立合お小ばる組と試
合致せ(鐘)其義の免下されト辭退をするを皆々進る爰
へ近習師来り大串四吾禁酒を破り喧嘩の末血右衛門外二
人まで切捨三人の傍興藏へ逃入しと告る(官六)我組下の
狼藉捕捕んと立上る(千)否鐘三郎奉公始に捕方付る
ト殿の奥へは入皆々上下手へは入跡官八鐘三郎に送れを
取し事を残念ありと官六と叫び天原流派と密談せんと奥
まは入跡三人を相手立廻り午鐘三出来りト三人を打
そへるト近習出来り三人を捕縛して引立てると奥方千早之
助喜太夫を運出来り今日の働さ抜群は付百石を遣し官六

郎同様指南番付九(鐘)有難事乍黒塚氏を差置て(喜)
君の上意(鐘)遠恨の程も(官)其心配の無用と出来り
何ぞ遠恨杯と(千)夫もて予も満足致す(官六)マテ組下の
者(千)酒興の上故吟味の上退放致せ(喜)最早譯師館ト
呼道具廻る
○辨登元の頼堂の場 茶屋女居る處へ醫者天原流派出来
り毒藥の調合して穢美お有付と云時師館と呼上手も千
早之助喜太夫官六郎鐘三郎皆々出来り(千)鐘三郎師
宅致さバツグ田仕致せ官六郎も遠恨無や官六只今盃
の取遣致せし上り(千)予も案心致せしと皆々供として殿
向へは入跡(鐘)穢作家を浪人あす折武術を以て二君お仕
へまじと尋しがと思案の折頼の木太刀落るも鐘三郎氣に
懸思案を換ね成ぬと苦心の体あて向ふへは入跡流派と
官八出来り喜太夫を毒殺せんと調合を頼みしが役に立
アノ鐘三郎を(流)本望遂おバ澤山穢美を(官)是の當坐の
と拾兩遺流派の押藏さ向ふを兩人見て思ひ入の幕

○三幕目大切 落窪住居の場 本舞臺邸内長家の模様正
面は精靈御有都て鐘三郎佛事の体爰は小笹茶を入居る
所化の柳屋を讀だ鐘三郎の慘病殆も最早百ヶ日(小笹)
夫が血を吐死せし毒藥にては吞し(所化)全く吐血成
されしからん(小笹)八幡宮へ怒を立しを破し故罪罰の當
りしが其上鐘三の當家を調伏おさん巧みありと疑ひ受悴
京太郎へ未家督を仰付られずと涙ふくれて佛壇へ回向を
する爰へ向ふ黒塚官六郎先跡天原流派出来(流)子
悴梅之助の城下へ踊を見よ参り京太郎の浪花へ参り留主
ゆゑ今日の小笹を就附貴殿の勝手お入内へ通り(流)
鐘三郎が死せし上り官六郎殿の妻もあれと挑小た笹らの
ぬ私し思召の有難けれ共ト貞を立承知せぬより(流)其方
が後妻お成バ京太郎へ家督を下され梅之助殿の引取被
七服の弟として養育するト進る(小笹)身も餘りし事乍穢
理有中の京太郎も鳥と相談致し(官)イヤ承知おくバ穢
言おし京太郎へお崇の來様も(流)果の路頭も迷を早く返

事と二人小笹は迫る處へ奥方京太郎出来り(官)扱の機
子をト兩人胸りする(京)如何おも承まのりしが一度繰せ
し上り貞女兩夫おまみへす父が病しせしとて再繰せよと
女の探を破する黒塚氏ト傍了簡が違ひ升(官)流)立
腹し貞女兩夫おまみへす杯とハ賊の武士の妻の云事小笹
の元祇園の藝子色を商ふ雪野の果(流)又此頃風説おのち
んく鴨の田樂親子と評判だ(小笹)身お覺のない其體
衣コリヤ聞捨お成升ぬ(京)ハテ拙者お任せ成れ升ト
留る官六流派の無念の仕打あて最是歸宅致そふト(官)穢
官杯の致さぬが頼て其身へ報ふで有ラリヤ城下へ參て
踊の見物でも致そふと兩人思ひ入有て向ふへは入跡お親
子愁ひの仕打(京)母上も此地お居れ升ぬ今言返せ
し上り謀て父が腹をハ刺伏せし杯と以て觸せしも彼れ等
が仕業また此上にも穢言おし如何おる無實も陥入るも計
りたし少しも早く浪花ある福原屋の伯母の方へ立越親
子三人身を全ふするが上分別ト云ふに小笹の當惑の思入

愛へ下女のおたり梅之助を運渡ながら歸り來り官六郎様
 の梓綾七、喧嘩をさされし處其場へ官六郎お官八が参り
 此悴り新参者の鐘三が小笹なりと坊様を打擲し立退ま
 したゞ残念で成ませぬと云小笹ハ無念の餘り立上るを京
 太郎が止め相手の大勢とても勝事ならずゆるみ此地を立
 退大坂の伯母の元へ落ん(小笹)福原屋へは堂助殿の義理
 もあれハ行難しと云處へ表お立開官六郎の中間偶内(元
 ハ升形屋の番頭鐘六)入來るを小笹見て胸りするを偶内
 ハ手をつき小笹様ハ紙圓町の磁子の内を思ひを掛高野迄
 運出せし身の誤りハ悔惜し官六が殿へ説言せし事を斷
 すと(京)羨子杯とせし者と妻お持しハ父の誤り今日限抽
 者の母でなしト仇討をせんが爲お母と縁切をし奥へ這入
 る跡小笹ハ愁の仕打て此上ハ本竹春太夫様お願京太
 郎を宥んト小笹ハ偶内梅之助下女を連向ふへ這入ト奥
 京太郎出て跡を拜仇を討んが爲心もさかい愛相づりし不
 幸の段ハ許て下され踊お交討捨んと刀を見るト道具廻る

○高市城下仇討の場 舞臺城下の休一面岐阜灯提を付愛
 へ三十人揃の衣裳ふて盆踊をして出來る此内ハ京太郎入
 交り官六ハ探し木隠れをするト向ふ官六ハ懸待の村
 (踊り子)を追駈來て強姦せんとする處へ京太郎出來りお
 村を助け立廻りの末官六を討捨て切腹せんとする處へ京
 太郎の情婦お谷が駈來て止る愛へ醫師流派が出來り官六
 お頼れ鐘三を毒賊せし一伍一什を白狀し切腹して娘お谷
 を女房お持て呉と頼折上手より喜大夫先小笹梅之助お
 たの偶内出來り官六が仇と分り京太郎も悦ぶ(喜)流派が
 切腹して仇も知れしゆる改めお谷を妻と多し願ふ抽者が
 上落窪家を再興歸參させん(皆々)悦びて拍子幕

明治十七年五月廿日御届 (定價金八錢)

日本橋區藏殿町一丁目四番地
 平 民
 齋 藤 長 八
 同 所 松 應 堂
 發 兌 元